

2026年6月21日(日)

日本学術会議 公開シンポジウム

13:50 ~ 15:50 | 第4会場 (ウイंकあいち 5F 小ホール2)

日本学術会議 公開シンポジウム 脳と摂食嚥下のクロストーク ~健康長寿社会実現に向けた未来への道標~

座長: 馬場 一美 (昭和医大)、松山 美和 (徳島大)

[PSY-座長] [コーディネーター抄録] 脳と摂食嚥下のクロストーク ~健康長寿社会実現に向けた未来への道標~

*江草 宏¹、*馬場 一美²、*松山 美和³ (1. 東北大学大学院歯学研究科 分子・再生歯科補綴学分野、2. 昭和医科大学歯科補綴学講座教授、3. 徳島大学大学院医歯薬学研究部口腔機能管理学分野)

[PSY-1] 認知機能と口腔機能の相関に関する医科歯科連携研究

*笛木 賢治¹ (1. 東京科学大学 大学院医歯学総合研究科 咬合機能健康科学分野)

[PSY-2] 高齢者の歯の喪失はアルツハイマー病の起因となる?

*後藤 多津子¹ (1. 東京歯科大学 歯科放射線学講座)

[PSY-3] 認知症の口腔機能と食行動

*池田 学¹ (1. 大阪精神医療センター (脳とこころの未来医療センター))

日本学術会議 公開シンポジウム

■ 2026年6月21日(日) 13:50～15:50 | 皿 第4会場 (ウインクあいち 5F 小ホール2)

日本学術会議 公開シンポジウム 脳と摂食嚥下のクロストーク～健康長寿社会実現に向けた未来への道標～

座長：馬場 一美（昭和医大）、松山 美和（徳島大）

共催：日本学術会議

後援：日本生命科学アカデミー

適切な口腔健康管理は、全人的な健康を支える基盤として健康長寿社会を実現する鍵となる。日本学術会議の「マスタープラン2020」では、口腔と全身の連関を解明する戦略プロジェクトが提示された。近年、医科歯科連携が進展する一方で、「脳と摂食嚥下のクロストーク」の全容解明は依然として大きな挑戦である。本シンポジウムでは、日本補綴歯科学会と日本学術会議が共催し、基礎・臨床の最前線で活躍する専門家を招聘する。最新知見を共有し、総合討論を通じて健康長寿に向けた未来の道標を導き出したい。（コーディネーター：江草 宏）

[PSY-座長] [コーディネーター抄録] 脳と摂食嚥下のクロストーク～健康長寿社会実現に向けた未来への道標～

*江草 宏¹、*馬場 一美²、*松山 美和³ (1. 東北大学大学院歯学研究科 分子・再生歯科補綴学分野、2. 昭和医科大学歯科補綴学講座教授、3. 徳島大学大学院医歯薬学研究部口腔機能管理学分野)

[PSY-1] 認知機能と口腔機能の相関に関する医科歯科連携研究

*笛木 賢治¹ (1. 東京科学大学 大学院医歯学総合研究科 咬合機能健康科学分野)

[PSY-2] 高齢者の歯の喪失はアルツハイマー病の起因となる？

*後藤 多津子¹ (1. 東京歯科大学 歯科放射線学講座)

[PSY-3] 認知症の口腔機能と食行動

*池田 学¹ (1. 大阪精神医療センター (脳とこころの未来医療センター))

日本学術会議 公開シンポジウム

2026年6月21日(日) 13:50～15:50 | 第4会場 (ウイंकあいち 5F 小ホール2)

日本学術会議 公開シンポジウム 脳と摂食嚥下のクロストーク～健康長寿社会実現に向けた未来への道標～

座長：馬場 一美（昭和医大）、松山 美和（徳島大）

共催：日本学術会議

後援：日本生命科学アカデミー

[PSY-座長] [コーディネーター抄録] 脳と摂食嚥下のクロストーク～健康長寿社会実現に向けた未来への道標～

*江草 宏¹、*馬場 一美²、*松山 美和³ (1. 東北大学大学院歯学研究科 分子・再生歯科補綴学分野、2. 昭和医科大学歯科補綴学講座教授、3. 徳島大学大学院医歯薬学研究部口腔機能管理学分野)

キーワード：脳、摂食嚥下、健康長寿

適切な口腔健康管理は、生活習慣病や認知機能障害等の予防に寄与し、全人的な健康を支える基盤として、健康長寿社会実現の鍵を握る。近年、口腔と全身の密接な関連が示唆される一方で、高次複雑系である生体において、その関連を科学的エビデンスに基づき解明し、制御することは依然として大きな挑戦である。

日本学術会議では、2020年の提言（マスタープラン2020）において、歯学委員会より「口腔と全身のクロストーク」および「脳と摂食嚥下のクロストーク」という2つの戦略プロジェクトを提示した。前者は、う蝕・歯周病などの口腔疾患と心血管障害、糖尿病、誤嚥性肺炎等との関連について多くの知見を積み上げ、医科歯科連携の定着に大きく貢献してきた。一方、後者の「脳と摂食嚥下のクロストーク」についても、オーラルフレイルや口腔機能低下と、心身フレイル、認知症等との関連解明が着実に進展している。しかし、口腔機能の精密な評価技術の確立や、超高齢社会における臨床研究の困難さといった課題も多く、脳と摂食嚥下の関連メカニズム（クロストーク）の全容解明は、いまだ途上に残されている。

そこで、本シンポジウムでは、日本補綴歯科学会と日本学術会議が共催し、脳と摂食嚥下の基礎・臨床の最前線で活躍する研究者を招聘した。演者の笛木賢治先生、後藤多津子先生、池田学先生に最新の知見をご提示いただくとともに、総合討論では座長の馬場一美先生、松山美和先生、森山啓司先生の進行のもと、健康長寿社会の実現に向けた道標となる方策について議論を深めたい。

日本学術会議 公開シンポジウム

2026年6月21日(日) 13:50 ~ 15:50 | 第4会場 (ウイנקあいち 5F 小ホール2)

日本学術会議 公開シンポジウム 脳と摂食嚥下のクロストーク ～健康長寿社会実現に向けた未来への道標～

座長：馬場 一美（昭和医大）、松山 美和（徳島大）

共催：日本学術会議

後援：日本生命科学アカデミー

[PSY-1] 認知機能と口腔機能の相関に関する医科歯科連携研究

*笛木 賢治¹ (1. 東京科学大学 大学院医歯学総合研究科 咬合機能健康科学分野)

キーワード：認知機能、口腔機能、医科歯科連携

超高齢社会における健康長寿の実現に向けて、歯科が果たすべき役割は今後ますます重要になります。近年、歯科疾患と認知症との関連に対する関心が高まっており、歯の喪失による咀嚼機能の低下や歯周病が、認知機能低下や認知症発症に関連することを示唆するエビデンスが、基礎研究および疫学研究を通じて蓄積されてきました。しかし、これらの研究の多くは歯科研究者主導で行われており、医科領域での認知は十分とは言えません。歯科からの知見を医科に広く届け、予防医学の一環として歯科医療を位置づけることが求められています。こうした背景のもと、（公社）日本補綴歯科学会は、（公社）日本老年精神医学会と連携し、医科歯科共同研究（ECCO）プロジェクトを立ち上げ、口腔機能と認知機能の関連に関するエビデンスの共創を目指しています。第一段階として、認知症専門医および歯科医師を対象にアンケート調査を実施した結果、歯の喪失や口腔機能低下と認知症との関連についての臨床的認識は、医師・歯科医師間で共有されていることが明らかとなりました。また、認知症の行動・心理症状（BPSD）と口腔の問題、歯科治療による認知機能改善に関する経験も共通して認識されました。さらに、オーラルフレイルの改善が認知症の先制予防に資するとの期待も示されました。現在は、BPSDと口腔機能との関連解明を目的とした医科歯科・多施設共同研究を進めております。本講演では、ECCOプロジェクトの成果とともに、医科歯科連携の意義と今後の展望を報告します。

日本学術会議 公開シンポジウム

2026年6月21日(日) 13:50 ~ 15:50 | 第4会場 (ウイंकあいち 5F 小ホール2)

日本学術会議 公開シンポジウム 脳と摂食嚥下のクロストーク ～健康長寿社会実現に向けた未来への道標～

座長：馬場 一美（昭和医大）、松山 美和（徳島大）

共催：日本学術会議

後援：日本生命科学アカデミー

[PSY-2] 高齢者の歯の喪失はアルツハイマー病の起因となる？

*後藤 多津子¹ (1. 東京歯科大学 歯科放射線学講座)

キーワード：アルツハイマー病、残存歯数、脳機能画像

近年、残存歯数や口腔内環境が認知機能低下・認知症発症と関連することが疫学的に示される一方、その神経学的機序は十分に解明されていない。認知症は脳機能低下により日常生活に支障を来す「状態」であり、その約7割がアルツハイマー病（AD）とされる。ADでは、異常タンパク質であるアミロイドβとタウの蓄積が脳神経細胞死を招き、臨床症状が出現する。私たちは、これら原因タンパク質の蓄積を生体内で可視化できる陽電子放射断層撮影（PET）を用い、動物で提唱された「歯の喪失→咬合力を感知する三叉神経中脳路核の変性→青斑核→記憶を司る海馬への神経変性の波及」という経路をヒトで検証した。65歳以上のAD患者29名と健常者21名を対象に、残存歯数および歯周病指標と、アミロイドPETおよびタウPETにより評価した脳内異常タンパク質蓄積量との関連を解析した。結果、歯周病指標とアミロイドβ／タウの脳内蓄積との相関は認めなかった。一方AD群では、歯が少ないほど脳幹（青斑核）のタウ蓄積量が多く、青斑核のタウ蓄積量が多いほど海馬のタウ蓄積も強かった。基礎研究の知見を踏まえると、歯の喪失がAD初期のタウ病態を促進し、青斑核から海馬へタウ病変が伝播した可能性が示唆された。これは歯科臨床で介入可能な口腔要因（歯の喪失・口腔機能）とAD中核病態のクロストークを示唆する所見であり、口腔ケアによる歯の喪失予防・機能維持がADの発症・進行抑制に資する可能性を示した。今後も、認知症にやさしい社会の実現に向け、機序の解明を進めていきたい。

日本学術会議 公開シンポジウム

2026年6月21日(日) 13:50 ~ 15:50 | 第4会場 (ウイנקあいち 5F 小ホール2)

日本学術会議 公開シンポジウム 脳と摂食嚥下のクロストーク ～健康長寿社会実現に向けた未来への道標～

座長：馬場 一美（昭和医大）、松山 美和（徳島大）

共催：日本学術会議

後援：日本生命科学アカデミー

〔PSY-3〕認知症の口腔機能と食行動

*池田 学¹ (1. 大阪精神医療センター（脳とこころの未来医療センター）)

キーワード：認知症、口腔機能、食行動

ようやく日本の認知症者の数は減少に転じ推計値は500万人弱、一方で認知症の予備軍を高頻度を含んでいる軽度認知障害（mild cognitive impairment: MCI）は550万人にのぼるといわれています。また、65歳以上を含む世帯のうち、単独世帯（独居老人）と夫婦のみの世帯は各々30%を超え、独居や夫婦のみの高齢者世帯で、MCIや認知症を発症している人が急増しています。このような脆弱な世帯では、軽度の身体機能や認知機能の低下が、住み慣れた自宅での生活を危うくすることになります。一方、アルツハイマー病に対する抗アミロイドβ抗体薬が本邦で実臨床に登場し、各種バイオマーカーの開発により、認知症性疾患もprodromalやMCIの段階での診断が可能になりつつあり、この段階で超早期介入の重要性が増しています。認知症の口腔ケアや食行動異常への対応も、医科と歯科が共同し、この段階から始めることができれば、本人や家族のQOLの維持に大きく貢献できる可能性があります。当日は、認知症の食行動を疾患別に紹介し、特に初期から出現する症状とその対応を議論してみたいと思います。